

おおつの歴史的風土と景観特性

●大津の歴史的風土

大津は、わが国の創生期から近世社会への発展・形成に至る各時代の歴史を連続的に、また文化の重層性を伝えることができる歴史的風土を持っています。

私たちは、国民的資産としての価値を持つ大津の歴史的風土を守り、後世に受け継いでいかなければなりません。

667年（天智6年）天智天皇が遷都した近江大津宮は、5年間の短い期間ではありましたが、日本国成立期の枢要な「都」として位置づけられています。

近江大津宮に関連する歴史文化資産としては、近江大津宮錦織遺跡をはじめ、崇福寺跡、南滋賀町廃寺跡、穴太廃寺など、この時代の寺院跡を残されており、周辺の樹林地と一体となり歴史的風土を今に伝えています。また、日吉大社、園城寺（三井寺）、石山寺についても天智天皇とのゆかりが伝えられています。壬申の乱により近江大津宮が廃止された後も、律令期の近江国庁跡、堂ノ上遺跡など、古代大津がすぐれた地域環境、文化環境にあったことを示しています。

また、奈良時代から平安時代にかけては、近江国府の所在地として政治の中心に位置しました。最澄によって創建された延暦寺は、後に法然、親鸞、一遍、栄西、道元、日蓮といった鎌倉仏教の開立者を輩出しました。さらに、石山寺や園城寺などの大寺を中心とした平安仏教・鎌倉新仏教草創期の文化の中心地として繁栄してきました。鎌倉・室町・戦国を経て江戸時代に至る間は、文化のうえではもちろんのこと、軍事上あるいは物資の中継基地として重要な地域であり続け、港町、宿場町、城下町として栄えました。

加えて、延暦寺周辺のモミ林やスギ林、園城寺や石山寺周辺のシイ林といった社寺の境内地に残る樹林や、浮御堂や唐崎神社などの前に広がる琵琶湖の水面など貴重な自然環境は時代とともに継承され、多くの歴史文化資産が山並みや琵琶湖と一体となり、近江八景に代表される特色ある歴史的景観を形成しています。

